

昭和十五年十二月十二日 臺高 第十八號抜刷

カント哲學の「黄金の鍵」

文三甲 上山春平

一
カント哲學の體系的理念が一七七〇年に於て既に理論的素地を獲取してゐたと謂ふ事は多くの哲學史家の一致する所である。其れ故同年に出版された「可感界並に可想界の形式と原理に就いて」と題する就職論文は、「純粹理性批判」が世に出る迄の約十年に亙る深い沈黙期と合せ考へる場合、殊に重要な役割を有つべきものと思はれる。彼が一七六九年の秋以來一つの根本思想に達して居り、一七七〇年には再びそれを變へまいと考へてゐた事はラムベルトとの通信(一七七〇・九・二)に依つても明かであるが、かの『思想の豊かな沈黙』の期間(一七七〇—一七八一)は決して平穩順調なる思索の日々であつたのではなく、寧ろカントの生涯に於ける最も激しい争闘の時期であつたとすら思はれる。其處では、既に一應の確定を見てゐた基礎的理論も幾度となく試練の鐵床を経て種々の變貌をなし且更にこみ入つた襞をも加へたに相違ないから、體系の鍵の發見は先づ就職論文に於て試みられ、次いで其の妥當性が「純粹理性批判」に就いてたゞされねばならない。

二

一七七〇年の論文第一章(世界一般の總念に就いて)はカント論理學の基礎概念の展開として特に注目されてよいと考へられるが、それは二節から成り、第一節ではかの有名な「分析と綜合との區分」、第二節では『世界』の定義要素たる『質料』・『形式』・『總括性』に就いて論じられる。第一節で殊に重要なものは、(一)複合的實體に於て『分析』がたゞ全體ならぬ部分即ち簡單なるもの、にのみ終るが如く、『綜合』はたゞ部分ならぬ全體即ち世界にのみ終る。(二)『分析』及び『綜合』には二重の意義があり、それは從位的に秩序付けられたものの系列に於ける質的、同位的秩序に於ける量的の兩義に解せられる。(三)『分析』及び『綜合』の極限的使用(イ↓單純性⇄連續量ロ↓總體性⇄無限量)は其の主觀的矛盾にも拘らず客觀的妥當性を保有する、等であつて、第二節では、(一)質料 (二)形式 (三)總括性と謂ふ見出しに依つても明かな如く、所謂「質料—形式」軸が論究の中心である。若しカントに於て『形式』が常に『先天性』として考へられてゐることに留意しつゝ就職論文の此の部分に對應すべき「純粹理性批判」の「緒言」に就いて「先天的—後天的」・「分析的—綜合的」なる二軸の交錯をうかがふならば、前掲ラムベルト宛の手紙

の言葉は、かゝる樞軸をめぐる『感性』と『悟性』との根本的相違（イ就職論文「感性とは、主観の表象状態が対象の現前に依つて或る特定の仕方でも觸發されることを可能ならしめる所の主観の感受性である。知性とは、主観がその性質上その感官に依つては捕捉出来ないものを由つて以て表象し得るところの主観の能力である。」「認識は、感性の法則に服する限り感性的であり、知性の法則に服する限り悟性的、乃至理性的である。」（第三節） 口純粹理性批判「我々の認識には二つの幹がある、それは恐らく一つの共通な、しかし我々には不可知な根から生じたもので、感性と悟性とである。前者によつて我々に対象が與へられ、後者によつてそれが思惟せられるのである。」（B.29f.）『B.は「純粹理性批判」第二版、数字は頁付。以下同書第一版はA.なる記號で表す』「我々はすでに全く異つた種類の、しかし全然先天的に対象と關係するといふ點では相互に一致してゐるところの二種の問題を知つた、感性形式としての空間時間概念と悟性概念としての範疇とがそれである。」（B.118g.）に就いての確信に結び付けられるであらう。

三

然し乍ら、『形式』を、純粹にして先天的なり、と考へたカントは「現象の形式は感覺に對して、すべて先天的に心性に備へられて居る、従つて一切現象から離れて考察されることができねばならぬ、私は感覺に屬する何ものもそれに於て見出されぬところの表象を純粹であるといふ。」（B.34）「經驗は性質の違つた二種の要素—感能に依つて與へられる認識質料と質料を整頓する或る形式と—をふくんでゐる、形式は純粹直觀作用と純粹思惟といふ内的源泉から生じたものである。」（B.118g.）悟性使用の形式として自ら規定した範疇と、感性の形式として規定した時空との理論的關係を見極めることが出来なかつた。範疇は悟性の、時空は感性の形式であるから共に純粹にして先天的であり其處に價值的優劣及び理論的上下位關係を見出すことは出来ないが、感性的直觀は統覚の客觀的統一に依り範疇の下に結合せられてはじめて客觀的認識と成り得る。それ故客觀的認識たる思惟は感性直觀に對して理論的には優位を占むべきであるにも拘らず、兩者の形式に就いては價值的差別及び上位下位關係は云々され得ない。即ち、「あらゆる直觀の可能性に關する最高原則は、先驗的感性論によれば——直觀のあらゆる多様が空間及び時間といふ形式的制約に従ふといふことであつた。あらゆる直觀の可能性の悟性に關する最高原則は——直觀のあらゆる多様が統覚の根源的綜合的統一の制約に従ふことである。直觀のあらゆる多様な表象はそれが我々に與へられる限りに於て、前の原則に従ふ、それが一つの意識に於て結合されることができなければならぬといふ限りにおいては、後の原則に従ふ。」（B.136）と彼は言ふ。

四

ライプニッツは錯雜混迷なる表象を受容性に明晰判明なる表象を自發性に基け、しかも兩者を連續的に理解してゐたのであるが、カントは其の各々が完結的體系を成し、自發性は先天的純粹概念に依つて規制せられ受容性は時間及び空間に依つて規制せられるものと考えへた。しかも更に力學及び數學が感性的表象の制約たる時空に關する認識であるにも拘らず決して錯雜混迷ではなく寧ろ窮極的明證性を保持する事實に着目した彼は、時空は感性的であるが且先天的であり法則性を有する純粹形式でなければならぬと論定した。即ち、「空間と時間とは純粹數學がその明確的且必然的として現れる凡ての認識及び判斷の基礎となすところの直観で、……特に純粹力學はその運動の概念を時間の表象によつてのみ成立せしめることが出来る、……空間時間は、まさしく凡ての經驗的直観に先行しなければならぬところの……我々の感性形式である。」(プロレゴメナ・第一篇・十)「表象の形式は對象の輪廓だとか型のやうなものだとかではなく、對象の現前から生じたる色々の感覺を夫々に同位的に秩序づける精神に植え付けられたる、「内在する」法則に他ならぬ」(就職論文第四節)として、既にライプニッツに依り證示されてゐた「純粹悟性概念の先天性」の他に「時空の先天性」と謂ふ新世界を樹立した。然し乍ら感性的認識の形式と質料とを峻別し、形式を主觀の機能的法則に質料を對象の感觸に歸した事は、純粹受容性としての感性を廢棄してその形式と悟性の形式とを並行させる考へ方に彼を導いた。即ち、ライプニッツ・ヴオルフに依つて確定された定式に基けば感性は現象のみに關係すべきであるが、現象は必然的に時空の制約を受けるから、時空は感性的である。更に感性は受容性でその認識は錯雜混迷なものであるとせられるが、時空の規定に従ひ當然感性的たるべき力學及び數學的認識が最高の明證性を例示してゐる點に照して、感性にも判明にして十全なる認識が存在し得べきである。それは感性の經驗的認識から分離して先天的認識と考へられねばならないから、感性にも悟性に平行して先天的認識が存在することになる。此處に、「彼は數學の先天性を確立せんがため、感性的認識に於て時空なる直観の『主觀的必然性』を全く受容性に持ち來たされる經驗の質料から分離し……かくすることに由つて」(ヴインデルバント・カント物自體説の諸相に就いて)時空を純粹悟性概念と同等なる心理的位置に押し遣り、時空と純粹悟性概念は知力の根源的活動への兩つの反省に外ならず、認識論的評價に於ては全然相等しき價値を有すべきであると考へるに至つた。

五

此の問題は、「一般的にいへば、悟性とは認識の能力である。認識とは所與表象の客觀に對する一定の關係である。客觀とは概念において、所與直観の多様が結合されてゐるところのものである。」(B.137)と謂ふ著名にして重要な命題に他の側面をひそめてゐる。日

常的用語法は此處では問題とならない、との主張も考へられるが、先づ常識の地盤を確保する爲に、此のかさかさとして抵抗を與へる原稿紙は果して客観といはれ得ないか、次々と繰り出でる之等の文字はどうか、否、焼け付く様に鼓膜を打つあの蟬の音はどうか、が卒直に考へられねばならない。それと面接し刻々に其の抵抗を感じてゐる此の物を私は原稿紙と呼ぶが、リツケルトの精密な論究（認識の對象・第一章・二、主観の客観に對する三様の對立）を俟つ迄もなく素朴な認識が自己の身體以外の外界を客観と稱するとき、かゝる客観としての原稿紙は、例へ一つの概念に於て結合されてゐると言はれ得るにしても、同時に時間及び空間なる形式に於て結合されてゐるものとしても説明され得ぬであらうか。否、寧ろ吾々は刻々と移り去る時間に於て此の抵抗を感じ、紙幅・行間等を空間的に知覚してのみ客観的對象たる原稿紙を認識することが出来る。以上總括せば、時空と純粹概念とは峻別的に併立せしめらるべきではなく何等かの相互滲透性に於て考へらるべきではないか、其の故に且兩者は共に表象一般にとつて不可避なる形式なのではないか、と謂ふ提題と成る。然し乍ら吾々は、カントの二元論的不徹底を克服し直観と思惟の二元を思惟一元に純化せんとした新カント派的意圖を新たに繰返して直観形式たる時空を思惟形式たる範疇の一つに數えなおすやうな理論的慘忍を試みるわけではなく、單に兩者の澁澗たる相互滲透を求めるに止まる。斯かる探究に於て一條の光明とも考へらるべき「原則の分析論」（純粹理性批判・先驗的原理論・第二部・第二篇）では、「純粹理性批判」の「感性論」に對應して「如何にして純粹數學は可能的であるか」と謂ふ提題の下に「プロレゴメナ」で取扱はれてゐる部分が、『量』及び『質』の範疇を基礎とし且「數學的」と規定せられてゐる第一・第二原則に滲透し、更に第一原則は「感性論」にて空間と關係せしめられてゐる外官の・第二原則は時間と關係せしめられてゐる内官の原理として述べられてゐるが、此の分析に於ては直観機能たる知覚が時空を其の形式として使用すべきものとせられてゐるに拘らず他面認識の機能とも考へられる場合、上述の命題と照應し、純粹概念と時空とは其の下で如何様な關係に置かるべきか、と謂ふ問題を生ずる。斯様な理論的困難は、「純粹理性概念の演繹」（先驗的原理論・第二部・第一門・第一篇・第二章）より「原則の分析論」へ移行行くに際して、「純粹理性概念の圖式性に就いて」（同・第二篇・第一章）と謂ふ章を必要不可欠たらしめた。

六

然し乍ら此の章は、「直観の形式―思惟の形式」として峻別せられた時空と範疇とを何等かの統一に於て把握し紋上の提問に解答を與ふべきものとして、必ずしも充分ではなかつた。即ちカントはN・ハルトマンの所謂「主知主義的先入見」に執はれ、直観は表象一般の質料であり思惟は形式であると考へて單に「質料―形式」なる概括的側面より個別的問題を處理した結果、質料的直観に於ける形式としての時空と思惟形式としての範疇との

關係を單に後者の圖式性と謂ふ半ば技巧的なる處理法に委ねなければならなかつた。斯かる事態は彼の特性的『偏執』に基くもので、それは明かに直觀より判斷、判斷より推論へと論理的上昇關係を認めてゐながら、「人間のあらゆる認識は直觀をもつて始まり、概念にすゝみ、理念をもつて終結する。」(B.730)「時空—範疇—理念」の間には其の様な關係を何等積極的に指示することなく、殊に「時空—範疇」を絶望的對立に迄持ちきたらせてゐると謂ふ點にもあらはれてゐる。「理念即ち純粹理性概念と範疇即ち純粹悟性概念とをその根源も使用も全く異つた種類の認識として區別することは、これ等すべての先天的認識の體系をふくむべき學問を確立するために極めて重要な事柄である。」「人間の認識の純粹な要素を攻究するに際して、私は長い間の思索の後に始めて、確信を以て感性的の純粹な基本概念を悟性のそれから區別し、分離することを成就したのである。」(共にプロレゴメナ)。

時空は確かに感覺知覚等感性的機能に必然的に伴つて表象せられるのではあるが、悟性的及び理性的表象にも同様に伴ふ形式ではなからうか。純粹悟性概念(カントの所謂「範疇」)は悟性表象の形式であると言はれるが、感性的表象と雖も悟性的に認識せられる場合にはそれに相當した悟性的表現を得、感性的乃至悟性的表象も理性的に認識せられるならばそれが相當した理性的表現を得ることが出来るに違ひない、廣義の範疇とは表象一般の形式が斯様にして理性的に表現されたものではなからうか。時空が感性的直觀の形式たるに盡きず全表象の形式でもあると謂ふことが確證せられるならば、それは何等かの仕方では範疇全般に滲透して考へられねばならない。總ての空間的表象の制約として想定される『アルファ軸系』は、「現象に依存する限定としてではなく、現象を可能ならしむる制約として：必然的に外的現象の基礎に存する先天的表象」(B.384)乃至「あらゆる幾何學的原理の必然確實性とその先天的構成の可能性」(A.)の基礎として規定せられてゐるカントの所謂「純粹形式」としての空間と何等異なることなき理論數學の對象であるが、それは同時に、「あらゆる實體に於て、眞の主體(詳しく言へば、すべての偶有性賓辭としての)が抽離せられた後に残存するもの」(プロレゴメナ)として『實體性』を要望する。斯くの如き時空と範疇との事實的相互滲透は、カントがその圖式論に於て行つた様な形式論的包攝關係を以てしては到底根柢的に説明する事が出来ない。感性和悟性との平行、純粹感性形式たる時空と純粹悟性形式たる範疇との峻別の併立、更に現象と物自體とのそれはカント哲學の研究に於て中心的題目を提出し、且歴史的關心をそゝる幾多の論議を惹起した。構想力(Einbildungskraft)及びその産出たる圖式(Schema)は、それ等の性質上此の問題の解決要素として當然重視さるべき概念であるが、殊に後者は性急な解決の爲には餘りにも性能を誇大せられ反對の爲には不當にも無視せられ一般には其の難解と晦澁との故に透徹せる理解を妨げられてゐる。吾々は、『純粹理性批判第一七七頁(B.)の命題は如何に解さるべきであるか、即ち範疇を経験若くは現象に適用して兩者を媒介する』ことは如何にして之に伴ふ難點を免れ得るか、といふ箇所にも増して私の關心を要求するものはありません。(一七九七・一二・一一・テイフトルンク宛書簡)と謂ふカントの言葉、及び純粹理性批判の「浩瀚なる全卷の眞髓」であり「内面的力學」であると言ふハイデッガー・「全

批判哲學といふのと同様に、カントの教説の直截不可缺而も無限に豊饒なる動因」と見るカツシラーの解釋を深く汲み取り、立脚地的外装は一應其の中に投入して、その構造を可能な限り判明に把握したい。

七

「さて我々は純粹悟性概念の先驗的圖式一般に本質的なるものを分析するといふ乾燥無味な仕事に停滞することを止めて、むしろ圖式を範疇の順序に従ひ範疇と連絡させて述べようと思ふ。」と彼に似ない逃避が其處で行はれてゐることを第一に注意して置かねばならない。ヴイルギリウスの句「彼等は其の巢より怠惰なる雄蜂の群をおひはらひ居れり。」を以て結ぶ「プロレゴーマナ」の序文及び「純粹悟性概念の演繹」(A)に於ける「豫備的注意」の冒頭に見られるが如き學問的峻嚴さは、此處では其の片鱗をだに現はしてゐない。惟ふに、「先驗的圖式一般に本質的なるものを分析するといふ仕事」は、既に述べた様な立脚地を保守する彼にとつて不可能にも近い難事ではなかつたらうか。「現象とその單なる形式とに關する我々の悟性の圖式性は人間の心の深みに於ける隠れたる術である、時あつて我々がその眞のこつを自然から學び得て之を赤裸々の姿に於て示すことは容易な業ではないであらう、ただ次の事だけは云はれ得る——云々」が所謂「先驗的圖式一般に本質的なるものの分析」に相當する一節であるが、其の部分を精査するとき、「感性論」と「論理學」とを峻別せば時空と範疇との滲透ははゞまれ、事實的要求を容れて相互の滲透を行へば批判體系は根柢より改組されねばならぬと謂ふ苦境の下に、兩者は半面滲透半面分立なる明かな矛盾の姿で露呈される。(以下—云々)—(A) 形像は産出的構想力の經驗的能力の所産である、感性的概念の圖式は先天的純粹構想力の所産で、云はばそれに依り、それら則つて始めて形像が可能となる所の略圖である、とは云へ苟も形像が概念と結びつけられるには形像がそれを描き出すところの圖式によらねばならぬ、形像それ自身は決して概念と完全に合致するものではないのである。之に反して純粹悟性概念の圖式は決して形像たらしめ能はぬものである。それは範疇によつて現はされる概念一般に従ふところの統一の規則に則れる純粹綜合で、構想力の先驗的所産である、(B) そしてこれは諸表象が統覚の統一に従つて先天的に一つの概念に於て相聯關すべき限りに於いて、あらゆる表象に關する時間といふ内官形式の制約のもとに内官の限定一般に關係すべきものである。(B.180f) (A)・(B) は筆者の記入) (A) の部分に於ては、圖式が形像とは區別さるべき事・範疇に従ふ「統一の規則に則れる純粹綜合」である事・更に「構想力の先驗的所産」なるが故に構想力の先驗的能力に依るものである事等が理解せられる。而して構想力の先驗的能力とは、「あらゆる經驗の可能性に對してさへも其の基礎に存するもの」(A.102) 卽ち「現象の必然的綜合的統一の先天的基礎を成して以て現象を可能ならしむるもの」(A.101) であり、「最も純粹なる先天的直觀(時間及び空間)ですらも、再生の汎通的綜合を可能な

らしむるところの(多様の)結合を缺く場合には、何等の認識をも與へ能はぬことを説明することが出来れば、それで構想力の綜合も亦あらゆる經驗に先行して先天的原理に基づくものであることが明かにせられる。」(A.101)かくて「構想力の純粹(産出的)綜合の必然的統一の原理は統覚に先行してあらゆる認識殊に經驗の理由」(A.118)をなし、「構想力の先驗的綜合に關する統覚の統一は純粹悟性」(A.119)といはれる。即ち先驗的構想力は先天的統覚の統一に先行し、且それに包括せらるべきものであり、内官的なる機能として内官の純粹形式たる純粹直觀を諦視することに依つて其の性格を説明することが出来る。それ故に吾々は「先天的にあらゆる認識の基礎に存する能力」(A.124)としてそれを有し、之に依つて「直觀の多様と純粹統覚の必然的統一の制約とを結合する。」(A.124)然し乍ら(B)の部分では、内官的結合と構想力の先驗的綜合との有機的聯關及びそれを媒介する圖式性が全く不透明に記述せられ、時空と範疇とはそれが爲に闇黙理にはあるが全く飛躍的に結合されてゐる。其の事は然し批判體系の根柢的破壊を伴ふべき事件であつて、それが正面的に容認せられる場合には、時空は全範疇に滲透し夫々の範疇に於て否それに於てのみ其の各相を表出し得る、と謂ふ結論を生じねばならない。カントは此の様な事態を「原則的分析論」より「辨證論」に迄互つて縷々と敘説してゐながら、既に指摘した様な『偏執』に基いて立脚地的には其の事を峻拒した結果、範疇は事實上批判體系全體に滲透すべき普遍性と基本性とを有するにも拘らず、時空との對立に於ては感性界より、理念との對立に於ては理性の世界より閉め出され、純粹悟性概念と等置せられねばならなかつた。

八

斯様な經緯の下にかの就職論文以來立脚地的に平行され來つた時空と範疇の相互滲透性が不可避免的に直視されねばならなくなつた時、カントは魔の深淵に立ち臨んだ時の様な激しい戦慄を抑へ得なかつたに相違ない。眩惑に陥り常の峻嚴さをも失つて彼は言ふ、「先驗的圖式一般に本質的なるものを分析するといふ乾燥無味な仕事に停滯することは止めよう」と。そして「圖式を範疇の順序に従ひ範疇と連絡させて述べ」と謂ふ氣易い仕事に取掛つたが、其の立脚地の故に兩者の根柢的綜合に迄立到ることのなかつた彼は、「如何にして……現象への範疇の適用が可能であらうか。」(B.176)といふ命題の下に形式論理的包攝關係を以てそれを處理した。即ち、「一方には範疇と他方には現象と同種的で従つて前者の後に適用されることを可能的ならしめ」る、「純粹で、しかも一面には知性的で他面には感性的な……ものが先驗的圖式」であり、「先驗的時間限定はそれが普遍的で先天的規則に基づく限りにおいて範疇と同種である」が、時間が「多様のあらゆる經驗的表象にふくまれて居る限りにおいて、現象と同種である」から、「範疇を現象へ適用することは悟性概念の圖式として前者のもとへ後者を包攝する先驗的時間限定によりて可能的である。」(B.177a)〈カントは「純粹理性批判」の第一版では「純粹悟性概念の演繹」に於て「凡て

の認識に於て必然的に現れる三重の綜合」として(一)直觀に於ける覚知の綜合(二)構想力に於ける再現の綜合(三)概念に於ける再認識の綜合を擧げ、(三)より(一)に降る『上からの途』と(一)より(三)に遡る『下からの途』を辿つて三者の統一的關係を明かにし、所謂先天的綜合判斷の『權利問題』に答へてゐるが、「原則の分析論」は又「判斷力の先驗的理論」とも云はれ判斷力とは「規則の下に包攝する能力」(B.171)であるから、純粹悟性概念の規則に則れる紋上の「三重的綜合」は此の章の命脈をなす。「原則の體系」の理論的素地を露呈せる「圖式論」に於て此の「三重綜合」の構造的中間者たる『構想力』の先驗的所産即ち『圖式』が、直觀的形像乃至現象とそれの規則たるべき純粹悟性概念との聯關に於て照明せられる所以である。然し吾々は前述の如き見地より斯かる技巧的(紋上の圖式性)解明に於て「反省概念の多義性」に就ての論考が概念のみに適用されて時空には適用されなかつた爲、時間の有する多義性が立脚地の動搖と相俟つて極めて技巧的に使用されてゐる。外衣をぬぎ捨て、寧ろ時空と範疇との相互滲透を直觀し、しかもカントの意とする所を深く汲み取つて次の如き解釋をとりたい。即ち、「範疇は『多様の綜合的統一』の機能である。感覚に與へられる對象(與へられる)及び「對象」と謂ふ言葉はカントに於てよく用ひられてゐるが、後者は「先驗的對象」||『否定性』を表す)は、觸發の瞬間的多様に依り、感覺的『實在性』之は「あらゆる感覺に於て先天的に認識されるもの」(B.209)としての「知覚の豫料」(第二原則)に對應する)の内的持續に基いて綜合覚知(『制限性』||『事物性』)され、「意識せられた直觀」たる知覚に於ては、觸發の多様が『數多性』・綜合に於ける純粹直觀たる内的持續が『單一性』・綜合覚知せられたものは『總體性』の概念に依つて表象せられる(主觀的感覺↓客觀的知覚||質の範疇↓量の範疇)。かくて「覚知の綜合」が知覺的に分析せられる時、綜合成果たる形像の形式をなす先驗的圖式(吾々純粹悟性概念の圖式性)を、カントの如く間接的媒介者としてではなく内在的機能として透視するからここに云ふ圖式は、「それに則つてはじめて形像が可能になるところのもの」(B.181)との言葉及びカントの示した若干の例證には極めて忠實であるが、彼の體系的意圖に對しては必ずしも整合的でない(、三角形に就いて言へば其の二方向性(C・G・S 單位系に於て記號的に表現せば C2)、は『單一性』・感覺質料たる面素は『數多性』・兩者の統一より成る形像即ち三角形は『總體性』に依つて表象される。それ故『單一性』『數多性』・『總體性』(量の範疇)は、直觀の時間的綜合に於ける「持續性」・「瞬間性」・「繼起性」(「いづれの直觀も多様をふくむ、然し心性が印象の繼起に從つて時間を前後に區別しなければ、その多様は多様としては表象せられぬであらう。瞬間にふくまれたものとしては如何なる表象もつねに絶對的統一體にほかならぬからである。この多様から直觀の統一體が成立するためには先づ多様性の概觀(Synopsis)次にその結合が必要である、此のはたらきを私は覚知の綜合」と名づける」(A.99)が、空間的乃至量的に表象せられたものであると云ふ事が出来る。」

吾々は此處に到つて躊躇なく次の様に云ひ得る。即ち「質料—形式」「ノエシス—ノエマ」は一意的に獨立な、表象に於ける、二つの方向であり、カント哲學の體系的『偏執』を撤回する時に必然的に其の理論的根據として見出ださるべき體系の鍵である。「感性的表象が表象一般に於て質料的なるが故に感性的なるものはすべて質料的である」と謂ふ「反省概念論」を支配してゐる考へ方は、「質料—形式」が表象座標軸として連續推移をなす値を其の上の各點に有し各座標は相對的にのみ形式的及び質料的であるべき點からして誤りであり、感性的表象も亦形式的及び質料的の二側面を有するものと考へられねばならない（就職論文の第四節及び「純粹理性批判」の「感性論」に於てカントは明かに後の觀點をとつてゐるが、それは「反省概念論」に於ける觀點と交錯して、感性に於て形式的なる時空と表象一般に於て（殊に悟性に於て）形式的なる範疇との價值的並に理論的平行を導入した。就職論文では未だライプニッツ—ヴォルフ體系の定式にとらはれて、一つ觀點を述べた第三節と他の觀點を述べた第四節とを互に相容れざる様式で提示し、「現象界に於ける形式的なもの」に就いて論じてゐる第四節では純粹悟性概念に依る認識を取扱つてゐないが、立脚地の充分固定した「純粹理性批判」では本論考の巻頭に抄録した様な併立的最高原則が樹立されるに至つてゐる。『單一性』は知覺的形像に就いて形式的で『單一性』は量の範疇に屬して第一原則の基礎をなし、外官に關係する物體の同一的形態として個別的空間形式であり、カントの所謂外官の純粹形式として空間の如きものではない。『數多性』に依つて表象せられる線素・面素・物體の部分等の空間表象はそれに對して質料的、『實在性』は感覺に於ける内的持續（カントは『實在性』の圖式を「充實せる時間」として與へてゐるが、それは寧ろ度を有つ「時間内容」として『制限性』に相當せしめらるべきであると思ふ。ジグワルトの「非人稱命題」と題する論文に、「意識物は、先づ *gehen; stehen; sein; werden* など最も一般的な概念の下に包攝せられる、それは何らかある仕方において *gehen; stehen; sein; werden* してゐるのである。次に更に詳細なる規定が附加される。待ち設けられたる言明は如何様に、に關せねばならない。之は副詞的に附加せられる。」と謂ふ言葉があるが、『實在性』は斯かる性質を有つ *sein; werden; haben* などに依つて表さるべき先驗的の心様相であり、其の限定は自存的に行はれることは出来ないがあらゆる時間的生起を其のいづれかに於て限定する）として形式的で（ライプニッツは、質料と謂ふ概念を勝義の形相に對立する *moles* と精神に對立する *massa* の二義に於て使用したが、後者の相關概念たる精神は、質料一般に對立すべき廣義の形相概念と見做され得る。『實在性』は前註の如く *massa* としての對象 X に對峙する精神的なものである）、『否定性』は其の先驗的對象として質料的（對象に於て感覺と對應するものは——物自體として——あらゆる對象の先驗的質料である。）（B.182）「表象に對應するかの X（對象）は我々のあらゆる表象と異つたものでなければならぬから、我々にとつては無である」（A.105）である。更に感性的表象に形式的側面が考へられる如く自發性に於ける表象にも質料的側面が考へられ、第一・第

二原則の直観的なるに對して其の比量性の故に「力學的」と特性づけられる第三・第四原則には明かに自發性に基くものであるが、第四原則の一項を成す『現實性』は「經驗の質料的制約と聯關するもの」(B.265)として質料的であり、「經驗の形式的制約」(B.265)たる『可能性』(dürfen; mögen; können—lassen—wollen; sollen; müssen などに依つて表さるべき「要請」で、其の基本的性格は「豫料」と類比的である)の所謂「副詞的制約」をなし(フツセルの「志向する意味—對象—充實せられたる意味」と謂ふ體系は、斯く寧ろノエシスのなる構造に對してノエマの色調が濃いのであるが、第二原則及び第四原則に對する吾々の解釋と考へ合はざるべき分析である)、第三範疇の『因果性』(其の「獨斷的微睡」を破つたヒュームの懷疑的論究が「一般的に考へられ得るかを攻究し……因果連結の概念は決して悟性が先天的に物の連結を思惟する場合の唯一の概念ではなく、却つて形而上學は全然斯かる概念のみから成立してゐることを」見出だしたカントが、「さういふ概念の數を確定しようと試み」た結果「願ひ通りに……成就せられた」(プロレゴメナ・序文)のがかの範疇表である。それ故此の概念を範疇表から取り除く等と謂ふことは夢想だにされなかつたに相違ないが、吾々は之を更に廣く更に適切な『依存性』(Abhängigkeit)と謂ふ概念に置換えたい。之は西田博士の所謂「個物的限定」の如きもの一般に妥當すべき概念である)は、『實體性』(吾々は『因果性』を『依存性』と置換えたのに應じて此の概念を『自體性』と謂ふ概念に置換えたい。アリストテレスに於て、同じもの、合つたもの、等しいものと謂ふ三概念は實體・性質・分量の三範疇に關係せしめられ、「實體が一つのものであれば、それは同じものであり、性質が一つのものであれば、それは合つたものであり、分量が一つのものであれば、それは等しいものである。」と言はれる時、「一つたること」即ち『自體性』が之等三概念の上位に考へられてゐるが、ヴェンデルバントは之に就いて、「ドイツ語ではこれを純粹な „Selbigkeit“ といふ語で呼ぶことも出來……すべての思惟一般にとつての、殊にすべての範疇にとつての窮極的な根本條件(相等性と同一性とに就いて)である、と述べてゐる。吾々は斯かる意味をもこめて『實體性』と謂ふ概念を『自體性』と謂ふ概念に置換え、之を以て西田博士が『個物的限定』の底に考へられた『一般者』の如きものと考へたい。然し『實體性』(Substantialität)なる概念は、社會的・歴史的悟性表象の形式としては不適當であるが、所謂「永遠の相」下に於ける形而上的理性表象の形式として新たに考へなおされねばならない)が「現象のあらゆる變易にも拘らず持續する」(B.224) 基礎 (Substrat) として勝義の形相的概念たるに對し、「凡ての變化は因果連結に從つて生起す」(B.232) と謂ふ原則に關係することに依つて、スコラ派の所謂「特定の質料 (materia signata)」即ち「個別化の原理」として質料的概念と考へられる(斯く兩方向に抽象せられた概念は『相互性』(Gemeinschaft)『質料的側面に考へられるのが「個物的限定」を表す『依存性』であり、形式的側面に考へられるのが「一般者を表す『自體性』であるとするならば、兩者の統一否兩者がその二側面として抽象的に思惟されうる實存的基盤としての『相互性』は、西田博士の所謂「辨證法的一般者」に對應せしめらるべきである。それは又博士の言葉に從つて「場所」と謂ふ概念に相當すべきであるが、例

へば「電磁場」が力線と媒体とを切離しては考へられない様に、『自體性』と『依存性』とは此の概念に於て具體的に統一せられてゐる。個物を e ・一般者を A ・個物と個物との媒介者を M と定め、三者の關係が $\frac{e_1, e_2, e_3, \dots}{A} M$ なる圖式に依つて表されるとき、 M は『相互性』 A は『自體性』 e_1, e_2, e_3, \dots は『依存性』と考へられてよい』に於て具體的に表象せられる。
「ノエシスノエマ」軸は、絛上の「質料—形式」軸に於けるが如き上位下位・「規定者—被規定者」の關係を貫くものではなく、斯様な「質料—形式」軸に沿ふた諸表象を一應通覽し、それを直觀的と概念的、又或意味に於ては主觀的と客觀的とに位置づける。既に形相及び質料の二義性をめぐつて指摘せられた第二原則と第四原則・第一原則と第三原則の近親性に依つて、兩概念のスコラ的形式論理的側面を強調する後二者は「概念」の側に、創造的實存的側面を強調する前二者は「直觀」の側に位置せしめられ、範疇表に於ては『性質』及び『様相』はノエシシ的・『分量』及び『關係』はノエマ的として規定せられる。吾々が之等の概念に就いて種々の側面より行つた論考、殊に「圖式論」に關する部分を考量せば、前二者が時間的、後二者が空間的として特性づけられることは明かであらう。

十

斯様な「質料—形式」・「ノエシスノエマ」二軸の有つ性格に就いては、カントも其の主著に於ける「反省概念の多義性について」と題する章で、明確にはないが充分なる洞察を示してゐる。此の點に於て吾々は此の章に大きな役割を認めたいのであるが、數多くのカント學徒は、之をライプニッツの實體論に對する駁論乃至は「原則の分析論」第三章の單なる附加物として注目を怠つた。論究の趣旨に基き、繁雜のきらひは免れないが此の章に於ける主要部分を抄録して検討に委ねる。

「あらゆる判斷が否すでにあらゆる比較が反省を要する、詳しく云へば與へられた概念の屬する認識能力の辨別を要するのである。私がそれに依つて、一般に表象の比較と、この比較がそれに於て行はれるところの認識力とを對照し、そして表象が純粹悟性と感性的直觀との何れに屬するものとして相互に比較されるかを辨別するはたらきを私は名づけて先驗的反省といふ。概念が一つの心性の状態に於て相互に關聯し得る關係は、一様性と差違性、合致性と反對性、内的なものとの外的なもの、被限定的なものとの限定性（質料と形式）とのそれである。」(B:317)

「總じて客觀的判斷を下すに先立つて我々は概念を比較する、それは全稱的判斷のためには（一つの概念のもとに於ける多くの表象の）一様性へ、特稱判斷を構成するためには差違性へ、肯定判斷の成立するためには合致性へ、否定判斷のためには反對性へ等、等、それぞれ到達せんがためである。此の理由から右の概念は恐らく比較概念と名づけらるべきものであらう。」(B:317f)

「然しながら理論的形式に存せずして概念の内容に存する場合、即ち物そのものが一様

的なるか差違的なるか、合致するか反対するかなどといふことが問題である場合には、物
は我々の認識力に對して即ち感性と悟性とに對して二重の關係を有つことができる、そし
て物が如何なる相互關係を成さねばならぬかといふ仕方は物が感性悟性のいづれの場合を
占むるかに依るのである。それ故に、先驗的反省のみが、即ち何れかの認識力に對する所
與表象の關係のみが表象相互の關係を決定し得るであらう。斯くして物が一樣なるか差違
的なるか合致するか反対するか等の問題は單に比較によつて概念そのものから直ちに決せ
られることはできぬ、却つてそれは物の屬する認識方法の攻究によつて即ち先驗的反省を
俟つて始めて決定せられるのである。」(B:318)

「此の先驗的反省は、物に關して何等かの先驗的判断を下さんとする者の免れることの
出來ぬ業務の決定に對して少なからぬ光明を得るであらう。

(一) 一樣性と差違性。或る對象が度々然し常に同じ内的限定(質及び量)を以て現は
ざる時には、それが純粹悟性の對象として認められる限り、いつでも同一のものである、
數多ではなくして唯一の物である、然しながら對象が現象であれば、概念の比較は問題と
ならぬ、概念に關しては凡て一樣であらうとも、此の現象の同時に於ける場處の差違は感
能の對象そのものの數的差違性の十分なる理由である。」

(二) 合致性と矛盾性。實在性が單に純粹悟性によつてのみ表象せられる場合には實在
性の間に如何なる反對も考へられぬ。「之に反して現象に於ける實在は勿論相互に反對し、
同一の主語に結びつけられる場合には、一方のものが他方のものの結果を全部もしくは一
部分廢棄することが有りうる。」

(三) 内的なもの外的なもの。純粹悟性の對象にあつてはそれと異るところのものに
對して何等の關係をも(現存在に關して)有たぬもののみが内的である。之と反對に空間
中にある現象的實在の内的限定は關係に外ならぬ、のみならず實在其ものが單なる關係の
總括にすぎぬ。」

(四) 質料と形式。此の二つの概念は凡ての他の反省の基礎に置かれるものである。そ
れ程不可分離的に悟性のあらゆる使用と結びつけられてゐる。前者は被限定的なるもの一
般を、後者は其の限定を意味する(何れも先驗的意味にて、といふのは我々は與へられる
ものの凡ての相違とそれが限定される仕方とを思考の外に置くからである)。

比較概念として、『合致性』及び『反對性』は質的判断に、『一樣性』及び『差違性』は
量的判断に關係する、と言はれてゐる部分に既述の處理法を適用すれば、前者はノエシス
面に、後者はノエマ面に位置づけられ、他方『合致性』及び『一樣性』は形式的、『反對性』
及び『差違性』は質料的と考へられる。更に、反省概念四組中、残りの二組「内的なるも
の」外的なるもの・「質料」形式」は、他の二組と相結合して整然たる論軸を構成するで
あらう。

嚮に吾々は「純粹悟性概念の圖式性」なる章に於ける問題の處理方式を全面的に否定し去つたが、其れが此の章にひそむ『體系の鍵』を見出だす爲の生産的破壊であつたと謂ふことは、それに對する吾々の積極的態度に依つて充分感知せられてゐた事と思ふ。「附録」と謂ふ約束しきの中に其の燦然たる光芒をつゝんでゐた其の鍵は、此處でも亦技巧的包攝關係で織り成された粗末な布にくるまれてゐる。「上に述べた所で分るやうに」(B.184)とやゝ斷乎とした調子で彼は始める。「何れの範疇の圖式も「時間限定のみ」をふくみ、之を現はす、……故に圖式は規則に従へる先天的時間限定に他ならぬ。そして此の時間限定は範疇の順序に従つてあらゆる可能的對象に關する時間系列、時間内容、時間順序、時間總括と關係する。」範疇の順序とは『分量』―『性質』―『關係』―『様相』であり、既述の處理法を再び適用せば、『時間内容』及び『時間總括』はノエシス的、『時間系列』及び『時間順序』はノエマ的、他方『時間内容』及び『時間系列』は夫々『時間總括』・『時間順序』に對して質料的と考へられる。此處に於て『反省概念』の軸と新たに産み出された『先驗的圖式』の軸とが或る緊密な關係に於て結合せられる。

十二

『反省概念』の敘述に續く「反省概念の多義性に對する註」の冒頭に、「斯様にして凡ての概念に其の用法の差違に従つて與へられるところの位置の判定、そして凡ての概念に此の場所を決定する規則的な指示は先驗的位置論 (die transscendentale Topik) と云はれ得よう、この敎説はつねに概念が何れの認識能力に屬するかを決定することによつて、純粹悟性の誤れる要求とそれから生ずる眩惑とを根本的に制止するであらう。」と謂ふ章句があるが、吾々は範疇表構成の直後に、「區劃は既に備つた。必要なことはそれを充すだけである。ここにのべたやうな體系的位置論 (die systematische Topik) は各概念の屬する本來の位置を容易に誤らしむることはなく、同時にまた空虚であるところの位置を容易に氣付かしむるものである。」(B.109)と謂ふ之と極めて類比的な一章を見出だす。「純粹理性批判」に於て『位置論』Topik は、「純粹理性は一個の全く孤立した、それ自身に於て遍通的に連結した領域である故、我々はすべての他の部分に觸れることなくしてその一部分に對してその位置と他に對する影響とを規定しなければ何ごとをも爲す譯にはゆかぬ」。(プロレゴメナ)とも言はれてゐる程に重視されてゐるが、『先驗的位置論』と『體系的位置論』とは全く同一のものであるのか、それとも若し異つたものとせば如何なる點に於て區別されるべきであるか。カントは、先驗的位置論はあらゆる比較と區別とに關するところの上に述べた四項目以上のものをふくまない。そしてこれが範疇と異なる所以は、對象を其の概念を構成するところのものに依つて現はすものではなくして、物の概念に先行するところの表象の比較をあらゆる其の多様性に於いて現はす點に存する。」(B.325)と述べて兩者を

明確に區別してをり、「概念の分析論」第一章（凡ての純粹悟性概念を發見する手引について）が純粹悟性概念の『形而上的演繹』、第二章（純粹悟性概念の演繹について）が其れの「先驗的演繹」といはれるとき（B.159 参照）、前者がカントの言ふ所に従つて結論的に『體系的位置論』であり、且「範疇一般の先天的起源の證明」（B.159）なるが故に『形而上的』として特性づけられるものとすれば、カントにおいて屢々行はれた相對的使用を想起し、「範疇の可能性を説明する」（B.159）後者を『先驗的位置論』として之より區別することも亦可能でなければならぬ（「究明が概念を先天的に與へられたものとして現はすところのものをもふくむ場合には、それは形而上的である。」（B.38）「或る概念を、それに依つて他の先天的綜合的認識の可能性が理會されうる原理として説明することを、私は先驗的究明といふ。」（B.40））。しからば範疇の『先驗的演繹』は當然四組の『反省概念』及び『先驗的圖式』に依つて構成せられる論軸を豫想してなされねばならない事になる。カントは、斯かる『先驗的演繹』に於て、第一版では「讀者に教へんといふよりはむしろ準備を與へ」（A.98）んが爲こと、（一）直觀における覺知の綜合、（二）構想力における再現の綜合、（三）概念における再認識の綜合に就いて述べ、「凡ての認識は心性の變様なるが故に、結局は内官の形式的制約即ち時間に從屬してゐる……それは凡て時間に於て整理され、結合され、相互に關係せしめられねばならぬ。（A.99）」と、時間限定の表象機能に對する密接な關係を指摘し、第二版では「吾思ふ」なる先驗的意識に基礎を置いて、構想力の主觀的統一と統覺の客觀的統一との間に於ける「ノエシス↓ノエマ」的座標推移、内的直觀の觸發に於ける時間的多样と構想力の繼時的綜合との間に見られる「質料↓形式」的座標推移を充分に示唆してゐながら、明確な形で之を與へることは終に爲し得なかつた。斯様な『演繹の不徹底』の故に、『原則體系』を論述するに先立つて「圖式論」を必要とし、又其れを述べ終へて後「原則の分析論」第三章及び「反省概念論」を附加せねばならなかつたのである。

十三

「其自身特に重要といふほどのものではないけれども、體系の完全性の爲には必要と思へる」（B.346）と謂ふ極めて約しい姿をした一章が「先驗的分析論」を去る前、實にその直前に於て見出だされるが、既に取出した二つの合鍵が如何程地中深く埋もれてゐたか、又其等が體系の鍵でありながら如何に目立たない形で表現されてゐたか、それにも拘らず兩者は體系に於て如何に重要な役割を有するものであつたか、が想起されるならば、それ等と全く同様な姿で拉れ出された此の第三の者も一應は注目の對象とされ得るであらう。此の第三の者とは所謂「無の概念の區分表」を指し、「範疇の體系は、純粹理性そのもの、如何なる對象の取扱をもすべて體系的ならしめる。……私は最も抽象的な實體論的分類の一つ即ち或もの (Etwas) と無 (Nichts) との概念の多様な區別に關しても此の手引を利用

し、そして規則的でしかも必然的な表を作り上げることを爲さずには居ることができなかつた。」(プロレゴメナ)と謂ふ言葉は此の表の重要性をさほど明確には表現してゐないにしても、それが如何にカントの心内深く萌え出てゐた思惟要請であつたかを示唆するには充分である。それは又「概念の多様な区分」と謂ふ言葉及び其の記載されてゐる場所に依つて明かな如く、四組の『反省概念』と斷じて切離すことの出来ない概念體系であり、その重要な亦『先驗的位置論』を構成する其等の論軸と固く結合して現れる點に存する。「先驗的哲學に於て我々の發足するを常とする最高概念は普通可能なものと不可能的なものとの区分である。けれどもあらゆる区分は区分せられた概念を前提するが故になほより高き概念を示すことができなければならぬ、それは對象一般(蓋然的に解せられて、それが或ものであるか無であるかは決定せられてゐないところの)の概念である。對象一般に關係する概念は範疇だけであるから、對象が或ものであるか無であるか、といふ區別は範疇の順序と指示とに従つて進むであらう。」(B.346)

「 無

二、概念の空虚な對象として。
(*nihil privativum*)

一、對象なき空虚な概念として。 四、概念なき空虚な對象として。
(*ens ratiōis*) (=*nihil negativum*)

三、對象なき空虚な直観として。
(=*ens imaginarium*)

思惟物(第一)と不合物(第四)とを見るに前者は單なる思惟の産物であるが故に可能的なものうちに數へられることは出来ぬ、然るに後者はしかのみならず概念が己れ自身を廢棄する故に不能的なものの正反對である、といふ點で兩者は區別されることか分る。それで兩者は空虚な概念である。これに反して缺性的無(第二)と構想的實在(第三)とは概念に對する空虚なる與件である。光が感能に與へられぬ場合には暗黒も亦決して表象されず、延長體が知覚されぬ場合には空間は決して表象されることはできぬ。否定性並に直観の單なる形式は實在的なものなしには何等の客觀でもないのである。」(B.348f.) 概念表の順序には忠實でないが、その前後に述べられてゐる各概念の性格及びカント物自體説の諸相を考量するならば、(一) *ens ratiōis* は『形式』・『概念』、(二) *nihil privativum* は『質料』・『直観』、(三) *ens imaginarium* は『形式』・『直観』、(四) *nihil negativum* は『質料』・『概念』を座標成分とするあらゆる表象の極限に考へられるものであり、従つて(一)と(三)は『一様性』及び『合致性』の極限に於て其の形式的側面に抽象された概念であるとすれば、(二)と(四)は『反對性』及び『差違性』の極限に於て其の質料的側面に抽象された概念である。斯かる極限的抽象概念を俟つてはじめて二つの座標軸が完結的體系を構成し得るのである限りに於て、此の概念表は「體系の完全さのために必要」との

みでなく、實に「必要不可欠」と言はなければならない。カントの斯様な消極的態度は、彼が認識論的限界概念として設定した「物自體説」に纏る紛糾の一素因をなしたものとも思はれるのである。

十四

カントが『位置論』を如何に重視したかと謂ふことは「純粹理性批判」の初版が出てから幾許もなくして書かれた「思考の方角を定むるとは」といふ小論に注目せば更に深くうなづかれるのであるが、『先驗的位置論』と『體系的位置論』との統一乃至分裂關係に就いては未だ充分なる論究が試みられてゐない。カントは前掲「附録」の冒頭に於て、「反省とは直接に對象の概念を得んとして對象自身に關與するものではない、先づ我々がそれのもとに概念に到達することの出来る主觀的制約の發見に着手するところの心性の状態である。これは我々の種々なる認識源泉に對する所與表象の關係の意識である、そして表象相互の關係は此の意識によつてのみ正當に規定せられることが出来る。」と述べ、『體系的位置論』たるべき範疇が表象に客觀的妥當性を與ふべき客觀的制約なるに反し、『先驗的位置論』を成す『反省概念』を「主觀的制約」なりとして二者の基本的對立性を示唆してゐるが、斯かる兩體系の分立的把握を、カント論理學に於ける最も基礎的なものとして取り上げた先蹤の一人として、吾々は獨逸西南學派の偉才 Wilhelm Winderband (1848-1915) を擧げる事が出来る。彼は「範疇の體系に就いて」と謂ふ論理的著作で、兩者を『構成的範疇』及び『反省的範疇』として特性づけ、前者は對象的妥當性を有するが後者は單なる表象的妥當性を有するにすぎない、として區別し、「構成的範疇の一切の適用が必ず對象的表象内容の『現實的』關係に限定せられてゐるのに反し、反省的範疇に於ては綜合的意識の自由なる自發性が開展するかの如きものとして現はれる。」(『範疇の體系に就いて』)と謂ふ基礎的區分の後、「全て構成的關係形式は内容の獨立的な『存在』に對する超越的關係によつて變容せられるのに反し、反省的範疇に於ては意識の内在的本質が最も簡明且つ純粹に表明せられてゐるから、……我等は先づ、反省の範疇から出發せねばならない、」と思惟過程に於ける兩者の關係を述べ、結論に於てはその統一性に就いて、「あらゆる現實的思惟は、反省的機能との活潑な交錯を示してゐる。然して此のことは、正に之等の兩系列が同一の根源から——即ち意識に於ける『多樣』の綜合的統一から生じたものであると云ふことに基くのである。」と語つてゐる。「多樣の綜合的統一」が「統一的基礎」として述べられてゐる所よりすれば、彼の論脈はカントのそれと極めて整合的な如くであるが、此の小論に續く「相等性と同一性に就いて」といふ論文で更に明確となる様に、決してカントの視點が純粹に一貫せしめられてゐるわけではなく、彼が兩範疇の關係を、「先驗的論理學」と「形式論理學」の關係との類比に於て視たと謂ふ點から其の事が照明せられる。即ち、ヴァインデルバントが、「すべての綜合にとつての基本的前提たる差別の機能には、その極限

の場合として反省系列の根本範疇、相等性 (Gleichheit) が發現し、同一性 (Identität) が對象的關係即ち構成的範疇の側に於てそれに對應する、」而して「この區別は原理的にはカントの形式論理學と先驗的論理學との區別に定位してなされたのである。」と言ふ場合、彼は兩概念體系を本質的分離に於て把握したと謂ふ點で、「純粹悟性概念は連結の概念であつて、従つて客觀そのものの概念であるが、反省概念の類はすでに與へられて居る概念を單に比較する概念であるから兩者は全く異つた性質と使用とを有する、」(プロレゴーマナ・第二篇・範疇の體系について) と謂ふカントの意圖に對し極めて忠實であつたと言はれ得るのであるが「範疇の體系について」といふ論題も、彼の問題圏の屬する紋上プロレゴーマナの標題から採られたものと推測される、カントは「私が反省概念と名を附けて、やはり範疇を手引にして表に作り上げたもののやうな概念が、實體論に於ては許可もなく正當な權利もないのに、純粹悟性概念の中に混入してゐる」が、範疇の體系が「賞讃に餘りある使用を示してゐる點は、さもなくば純粹悟性概念中に混入し易い異種の概念をすべて排斥して、如何なる認識にも其の位置を決定するにある。」(プロレゴーマナ) と言つてゐる様に、「まだ嘗つて形而上學の體系に於てなされたことのなかつた」(同書) 先驗的理性概念と純粹悟性概念との「必然的分離」及び反省概念と範疇との「嚴重なる區別」を先驗的論理學に於て行ふことにより、彼以前の一般的論理學に伏在する迷蒙を打破しようとする試み、斯學と形式論理學との根柢的相違を、前者が其の様な體系の確立に依つて分離的に使用する他種概念體系を後者が混淆して使用する點に指摘した。即ち、兩論理學の差別にとつて重要な事は、斯かる二つの概念體系の「あれを採るか―これを採るか」ではなく、兩者を原理的に分離して使用するか、然らずして混用するか、に存するのである。かくて、「範疇は、二個の主要なる羣に分岐する。そしてこれは―カントの用語に従ひ―構成的範疇及び反省的範疇と名付くることを最も良しとする。此の區別が先驗的論理學及び形式論理學の區別と契合することは明白である。」(範疇の體系に就いて) と謂ふ洞見も少なからず標的を外れたものであつたと言はねばならない。

結語

以上の如き見地に從へば、「純粹理性批判」を全く異質的な二つの部分に統轄し第一部を『先驗的位置論』・第二部を『存在學的原論理』と性格づけることが出来る。批判的精神は第一部で徹底的に強調せられ、此處では、「如何にして先天的綜合判斷は可能なるか」と謂ふ批判全體の解くべき根本設問をめぐつて存在學(勝義に解すれば形而上學)の「内面的可能性」が露呈せられ、此の「最高原則」への解答は、「經驗一般の可能性の制約は同時に經驗の對象の可能性の制約である」と謂ふ基礎的命題を結果して、學の第二部は此の『確保されたる素地』の上に構成せられる。範疇は第一部で其の骨組を與へられ第二部に於て體系的構成を獲得するであらう。而して斯くの如き方法に依れば「純粹理性批判」は次の

如き體系的整備を得ることが出来る。〔印は「純粹理性批判」第二版の目次に従ふ事を意味する。〕

第一部 先驗的位置論 (第一圖参照)

第一編 先驗的方法

第一章 先驗的論理

(一) 『緒言』

(二) 「就職論文」第一章及び「論理學」参照

第二章 先驗的機能

(一) 『純粹悟性概念の演繹について』

(二) 『先驗的感性論』・第一節及び第二節

第二編 先驗的原理

第一章 内在的位置論

(一) B.155の註(「吾思ふ」に就て)

(二) 『反省概念の多義性について』(註を除く)

(三) 『純粹悟性概念の圖式性について』

第二章 超越的位置論

(一) 『現象體と可想體とにあらゆる對象一般を區別する理由について』

(二) 『反省概念の多義性に對する註及び無の概念表』

第二部 存在學的原理論 (第二圖参照)

第一編 『分析論』

第一章 範疇的分析論

(一) 『凡ての純粹悟性概念を發見する手引について』

第二章 『原則的分析論』

(一) 『純粹悟性のあらゆる原則の體系』

(二) 『感性論』の緒言及び一般的註

第二編 『辨證論』

附論

カントは、「負量の考を哲學に應用する試み」と題する奇異な論文に於て、「哲學は數學の理論を利用してこれまで考へても見なかつたやうなことを成就した。しかしこれは自然學にかぎられてゐる。形而上學は、その理論なり概念なりを採つて利用しようとするどころか、却つて往々に之を刃を向け、考察を進める上に確實な根據を藉りられさうに思へる時にも強ひて數學者の概念を何か作爲の精妙なものゝやうに考へ、その領域の外ではあまり眞でないとしてゐる。……私はいま、數學ではよく知られてゐながら哲學では殆んど使

はれてゐない一つの概念を哲學に關聯させて考察しやうと思ふ。」と述べてゐるが、彼は、ライプニッツが微分概念に依つて「單子論」及び「形而上學敍説」の基礎概念を把握した様に、此の論文に於て『先天的綜合判斷』の原理を記號的に把握してゐる。あらゆる側面に於て有限性に纏綿せられる吾々人間は、認識の最高部門に於てすら對象の視象性を其の明證的基礎として要求する。言語・數・圖形等は此の意味で常に人間的思惟を確固たり透徹たらしむるに役立つてゐるが、「哲學者に三角形といふ概念を與へ、三角形の角の和が直角に對して如何なる關係にあるだらうかを、彼の仕方で見せしめよ、そこで彼の有するのは三直線によつて圍まれた一つの圖形といふ概念と、この圖形における同じ數の角といふ概念だけである。この概念についてどれほど熟慮しようとも、彼は何等の新しきものをも導出せぬであらう。直線・角或は三といふ數の概念を分析し判明ならしめることはできても、これ等の概念に於て全然ふくまれて居らぬ新しき性質へ到達することはできぬ。然しながら幾何學者がこの問題を取り扱ふとせよ。彼は直ちに一つの三角形を構成することに取にかゝる。……彼は推理の連鎖によつて、しかも常に直觀に導かれて、問題の全く明瞭にして普遍的なる解決へ到達する。」(B744f)と云はれる時、孔子が、「書は言を盡さず、言は意を盡さずと。然らば則ち聖人の意は、其れ見るべからざるか。」と謂ふ自問に對し、「聖人象を立てて以て意を盡し、卦を設けて以て情偽を盡し、辭を繋げて以て其の言を盡し、變じて之を通じ以て利を盡し、之を鼓し之を舞し以て神を盡す。」(繫辭上傳第十二章)と自答する時、視象的環元の重要性が東西の代表的哲人に依つて等しく強調せられてゐるのである。表象の構造と其れの複雑なる機能とを空間に於て視象化し且其のものに自己の原理を與へる爲には、表象の構造が空間の原理に從つて再構成されねばならない。幾何學は數千年の歴史の中に空間的原理の深みを驚くべき明晰さを以て照出し、其の最も發展せる體系は斯かる再構成に於ける樑木を其處から選びとるに何等の躊躇をも與へない。幾何學の前提が空間であるのに對し存在學の前提は存在乃至表象一般であるから比論的のみにそれは可能なのであるが、此の様に於て構成せられる視象的體系はまた空間的原理に比論的に從ふことが出来るであらう。

既に述べた所に從つて吾々は表象一般を質點の二次元的連續體系として規定することが出来る。今かゝる表象平面に直交座標系「質料形式」 \parallel 「 x — x 」・「 y — y 」 \parallel 「 x — x 」・「 y — y 」を想像せば、點A(イ圖参照)には其の直角座標 (x,y) が對應する。かゝる表象空間に於て一つのベクトルを考へるとき、それは一つの有向線分 PQ で表される。平行移動に依つて PQ と重ね合し得る一群の有向線分は、何れも PQ と同一のベクトルを表す。之等の有向線分と同じ向きをもち同じ長さを有つた有向線分 OA を座標の原點Oを通つて引けばAは定點となる。即ち一つのベクトルが與へられるとき、之に依つて點Aが定まる。

【図1】イ圖

次にベクトル OA をAで表し、其の成分へA點の座標 (x,y) として此の事實を $A(x,y)$

の如きものが製作され得る。
【図3】〔第一圖〕
【図4】〔第二圖〕

Kyoto University